

大阪商業大学学術情報リポジトリ

アミューズメント産業研究所にある囲碁関連資料について一見の価値ある文化財たち

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2014-12-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 尾崎, 宏, OZAKI, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/27

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



〔研究ノート〕

アミューズメント産業研究所にある 囲碁関連資料について

－ 一見の価値ある文化財たち－

尾 崎 宏

囲碁の発生は、チベット高原のシッキム国生まれとか、中国生まれとか巷間言われていますが、この問題は谷岡学長にお任せしまして、本稿では碁石や碁盤、その他アミューズメント産業研究所所蔵の囲碁関連品について述べたいと思います。

碁石

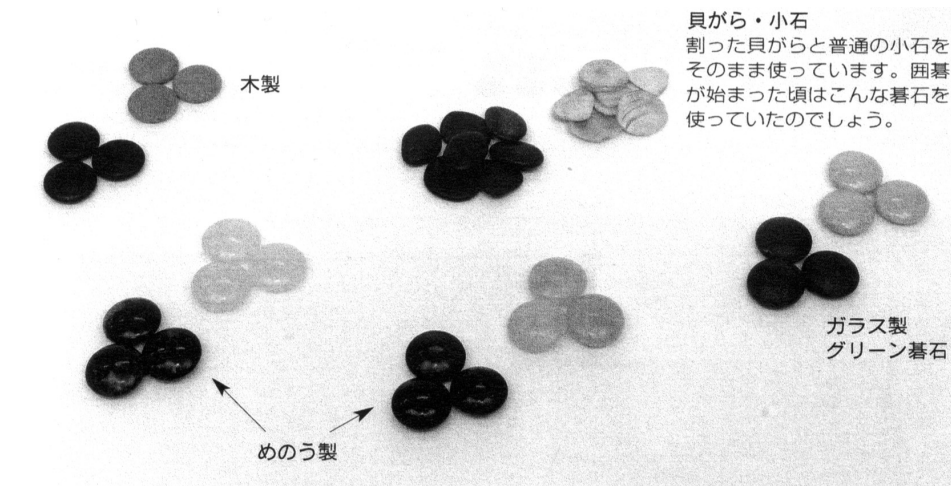
『源氏物語』と『枕草子』には、囲碁の場面が多く登場しますが、このように平安貴族の時代には、女性も囲碁を愛好していたようです。おそらく聖徳太子時代より以前に日本に入ったものと考えられます。その後貴族・武家社会のみならず、庶民の間でも囲碁は娯楽の王様の地位にあったのでしょう。徳川初期より官許制度にて益々発展し、日本の囲碁文化は他国に例を見ない程隆盛を極めました。と同時に、碁盤や碁石なども華美になっていきました。

碁石の素材は、木、石、陶器、象牙など、いろいろなものが試されたようです。研究所にある碁石のうち、変わり種をいくつか見てみましょう。

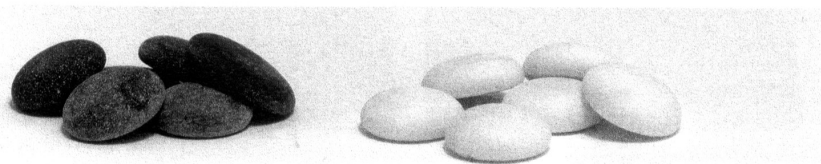
通常の碁石は、黒は那智の黒石、白は蛤貝で作られます。より普及品として、ガラス製やプラスチックもありますが、スタンダードではありません。

那智の黒石は大量にありますから、値段にはあまり関係ありません。碁石セットの価格のほとんどを決めるのは、白石の厚さ／薄さとされています。もちろん厚い方が希少で高価ですが、直径は常に22ミリです。

徳川幕府中期より、他人より厚い石を所有することが一種のステイタスとなりました。この傾向は明治維新で一時衰退しましたが、明治20年頃より碁界が立ち直り、政府要人や財界人たちの間で、より良い道具（碁石、碁盤、碁笥）を競う文化が再燃します。



碁石いろいろ



餅型の碁石

餅型の碁石は中国・東南アジア独特でこれら地域では伝統的なスタイルです。

徳川時代の高級碁石は、関東では三河湾の底をさらって、10センチ以上に育った蛤をいくつも集めて作りました。厚さ10ミリを越えるものは、1個の貝から4個の石が取れる程度。1セットで白石は180個要りますから、そうこうするうち三河湾の蛤は、明治時代までに枯渇してしまいました。

宮崎県の日向浜で三河蛤より大きな蛤が出現しました。特産品としてにぎわいましたが、後先考えずに乱獲したため、これもまた採れなくなってしまいました。前後して、メキシコからやや大ぶりの蛤が輸入され始め、日向蛤の減少を補うようになりました。メキシコ蛤は日向物より目が粗く色もくすみ、品質的には劣っていましたが、それとて採取量が減り、今では貴重品です。

10年ほど前の宮崎県日向碁石の価格表が手元にありました。

日向特産本蛤碁石				
〔本那智黒石付〕				
価 格 表				
品 名	正 産 厚 寸	雪 印	月 印	花 印
25号	7.0ミリ	60,000	40,000	20,000
28号	7.5ミリ	120,000	70,000	35,000
30号	8.0ミリ	280,000	200,000	60,000
31号	8.4ミリ	400,000	280,000	100,000
32号	8.8ミリ	700,000	460,000	150,000
33号	9.2ミリ	1,200,000	700,000	200,000
34号	9.5ミリ	2,300,000	1,400,000	350,000
35号	9.8ミリ	4,000,000	2,500,000	600,000
36号	10.1ミリ	6,000,000	4,000,000	900,000
37号	10.4ミリ	9,000,000	5,600,000	1,100,000

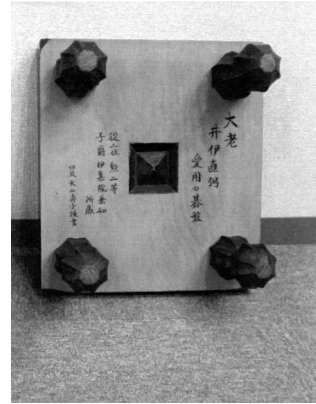
37号（厚さ10.4ミリ）までしか表示されていませんが、この上は日向蛤では40号までありますし、メキシコ蛤では50号などというゲテモノ（打つとユラユラする）まで存在します。ただし37号より上は級数的に価格も上昇するため、かなり貴重品でしょう。日向産40号の石（11.3ミリ）はパプルの頃ですが、状態の良いものなら1セット（180個）2,000万円は超えたといえます。黒石を180個で100万円と考えても、一粒10万円以上したことになります。純金より高いでしょう。

大阪商業大学には、その所蔵品の中に厚さ約10ミリの三河蛤の石と、厚さ約11ミリ、40号に近い日向蛤があります。かなりの値打ちのもので、碁石匠と相談して手入れすることを勧めます。

碁笥

今紹介した三河蛤の白石は、もともと彦根藩の井伊家所有のもので、うるし塗りの赤い色の碁笥に入れられていたものです。井伊家はご存知の方も多いと思いますが、「赤備えの武具」で知られ、勇猛さの証でもありました。この碁笥はそのシンボリック・カラーと同じ色の中に見えます（残念ながらモノクロ写真です）。

この碁笥と碁石は、実は私（尾崎）が仲介の労を取りましたので、由来をよく覚えています。井伊直弼公は部屋住みのころに囲碁に親しまれ、この碁笥を愛用していたそうですが、直弼公亡きあと明治期に井伊直憲伯爵に引き継がれ、碁仇きの伊集院子爵（兼知）に形見として遺贈されたそうです。その伊集院家の縁者（兼和の四男、伊集院ただす）から、日本棋院の有名なプロ（伊藤義夫五段）を継いで、大阪商業大学ア



井伊家ゆかりの碁笥（左）と碁盤（右）

ミュージメント産業研究所に安住の地が定まったのです。

よく見ると井伊家家紋の橘と井の字が彫られています、まさに天下の重要文化品です。大学が専門家に鑑定をお願いしたところ、まぎれもなく本物で、かなりの価格評価（ん？百万円）が与えられていたそうです。

大阪商業大学アミュージメント産業研究所にはもうひとつ、歴史的価値の高い碁笥（と碁石）があります。これは本因坊家が分解せざるをえなくなった明治期、本因坊丈和の三男、中川亀三郎が持って行ったものですが、碁笥としては珍しい梅の木で作られているのです。梅はめったにこれほど太くなりませんから、今後も碁笥の材料となることはないかもしれません。箱書きも含めてご覧下さい。



箱に記された由来は幕末（文久）の話です。第14代将軍家茂に降嫁することになった皇妹和宮を向かえる準備のため、薩摩藩の一行が京都の相国寺に宿を構えていました。

その折に境内の由緒ある梅がついに寿命となって切り倒され、その木で作った碁笥を住職から見せられたそうです。どうしても欲しくなった薩摩の代表は、かなりの金を積んでそれを手に入れたそう。

その梅の木がなぜ由緒ある梅だったのかと言いますと、それは『大鏡』にも登場する木だったからです。ある時、その梅を（当時の天皇の依頼で）他所に移す話があった時、寺のゆかりの娘が次のような歌を詠んだそうです。

勅なればいともかしこく鶯の 宿はととはばいかがかたえむ
勅命だから（この紅梅を）献上することを断わるのはまったく畏れ多いことですが、もし鶯がやって来て、私の宿はどこに行ったの、と問うたなら、私はどう答えればよいのだろう。

この歌を知った天皇は自らを恥じ、梅は移動せずにすんだという話。そんな歴史的な梅の木だったのです。その木で作った碁笥が存在すると思うだけでワクワクしますね。一度アミューズメント産業研究所で確かめてみて下さい。

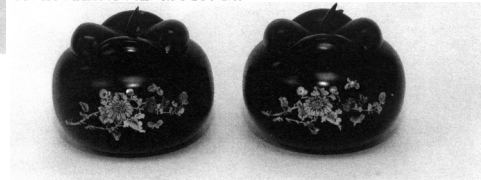
研究所には、これら以外にもさまざまな素材の碁笥があります。まとめてご覧下さい。



中国の碁笥
左：木製螺鈿（らでん）細工
右：上段 木製象眼（ぞうがん）細工
下段 中国漆（うるし）工芸品（セットの碁石が半透明の黒と緑の珍しいもの）

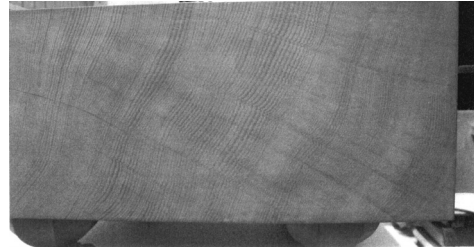
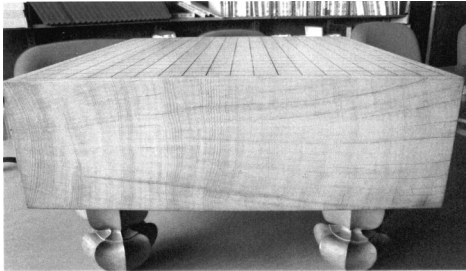


中国の碁笥
東夷の型をした碁笥で、鑲嵌木実墨匣棋盆という名称が付けられています。中国の碁石のサイズに合わせてあり、日本の碁石は大きくて盤に収まりきりません。

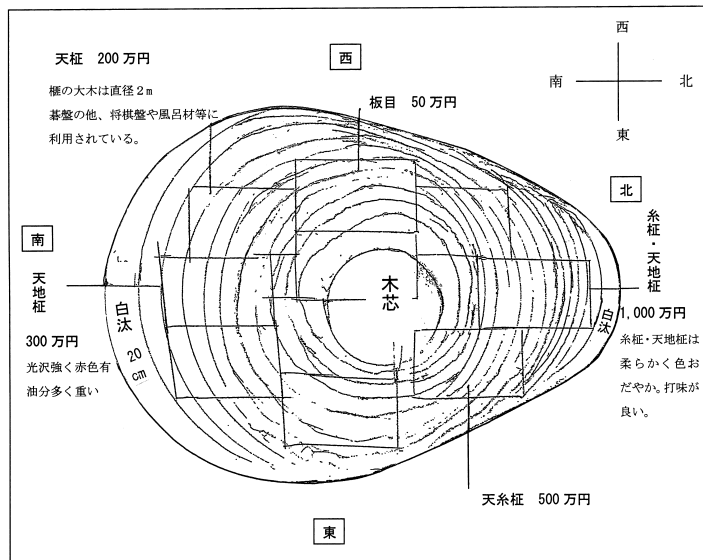


碁盤

先ほど見ていただいた中川亀三郎所有の碁盤、谷岡学長は日本棋院所有の「雪の碁盤」と同一の榧から作られた可能性を指摘していますが、確かに木目が似かよっています。まったく同一の木ではなくとも、同じ産地の同じ太さの木であったろうと推察します。



(左) 中川亀三郎の愛用盤 (右) 雪の碁盤(日本棋院蔵)



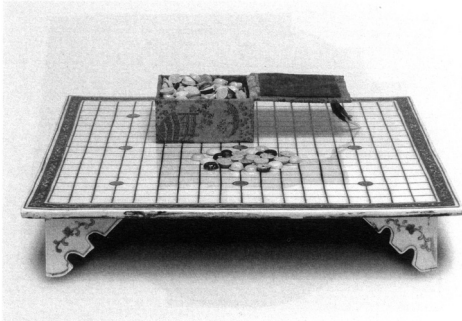
丸八碁盤店銀座店 鬼頭店主より教示

もともと雪の碁盤は本因坊家から徳川家に贈られた三面(雪・月・花)のうちの一面ですが、残りの所在は不明です。三面とも当時の天下の銘木から作られたものです。それに似た木目で、しかも丈和の三男が本因坊家から持ち出した品であるとすれば、学長の指摘もあながち的外れではないかもしれません。

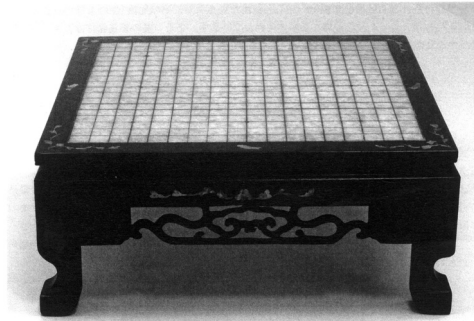
碁盤は樹齢700年以上の樅が最高級とされます。しかもその木から最上の部位を使用します。征目(四方征、天地征、天征の順に珍重される)が美しいものが特に良いとされますが、この碁盤は見事な天地征です。

研究所内には6寸以上の厚さの征目盤がいくつかあり、それらは皆高価なものと考えられますが、図版的には似たものなのであえて紹介するのはやめておきます。それよりいくつか変り種がありますので、それらを見ていただきましょう。

アミューズメント産業研究所にある囲碁関連資料について



中国で作られた陶器製の碁盤
楕円になっており、中国の古典的な碁盤の特徴を良く表しています。
碁石も陶器で中国独特の形になっています。



中国製の碁盤
木製の盤に呉縞工のようなものを象嵌のように埋込んでいます。
日本とちがい中国や東南アジアの国々では楕円スタイルの盤が数多く作られています。



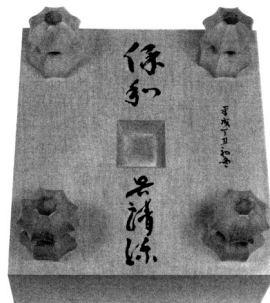
国産不明の素木細工の珍しい碁盤
相当古いもので真ん中から二つに割って折りたためるようになっています。



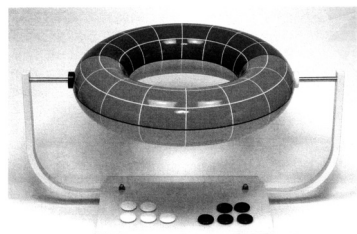
石製碁盤
この写真では見えませんが、橋本宇太郎の署名が彫られています。



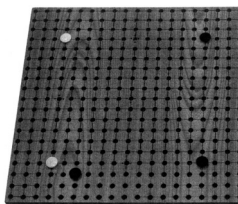
机型碁盤
引出しは4つあり2組の碁石が入るようになっています。
碁盤は表が19路、裏が13路になっています。(中国製?)



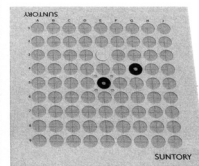
櫃の碁盤

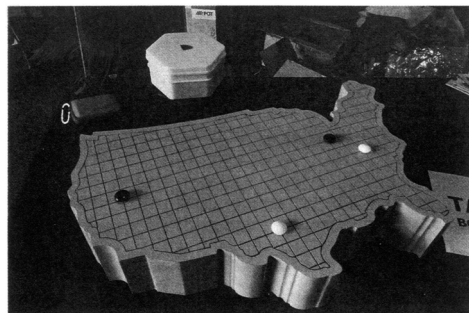


ドーナツ型回転碁盤
隅や辺がない碁盤で棋譜がとりやすいように4色に色分けされています。



振寛庵書者用碁盤
旧式19路盤(左)と9路盤(右)
(森野節男氏寄贈)





ノースカロライナ州、2012年8月5日

その他の物品

アミューズメント産業研究所には碁石、碁笥、碁盤以外にも囲碁関連グッズがいくつもあります。特に重要なものは本や雑誌類ですが、それ以外にもいろいろあります。今回は一部を紹介しましょう。まずは著作物から。

著作物



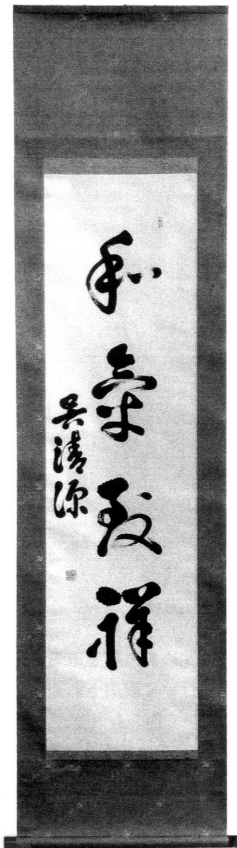
あまりに大量（数千冊）ですので、ほんの一部です。特に雑誌類（ピリオディック）は、戸張正氏がほとんどすべての種類をキッチンに残してくれました。棋道も欠号なく、すべて揃っています。この場を借りてお礼申し上げます。

書画

下の写真は研究所にある多くの掛け軸のうち、呉清源、本因坊秀哉、本因坊秀格の3人によるものです。呉清源は今年5月に100歳の誕生日を向かえますが、まだ現役です。少しは見習いたいものですね。おしなべて大成した人は、書も上手いものと感じます。

研究所の色紙や扇子類はおびただしい数にのぼります。その他浮世絵類も（中には本モノか否かわからないものも交じっていますが）充実したコレクションです。

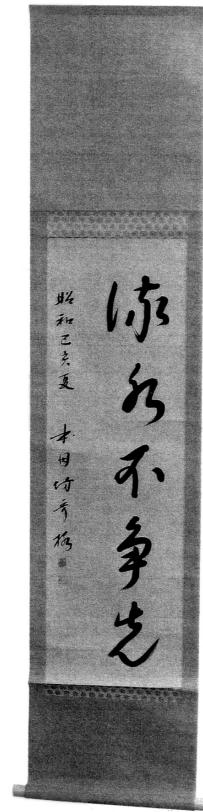
掛軸



呉清源の書
呉清源（1914年－）
中国生まれで、1928年14歳で来日し翌年、飛付三段を許されました。全盛時代は日本の代表棋士をことごとく打込み、第1人者として君臨しました。現在も主催する研究会にはたくさんの棋士が集まります。



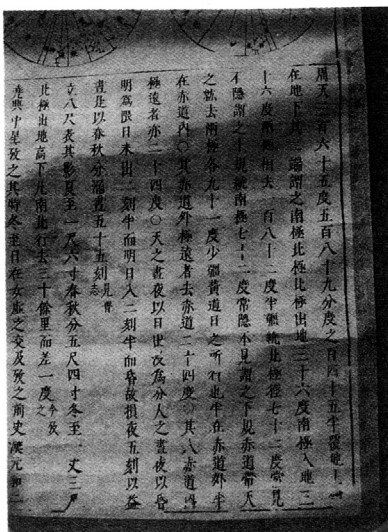
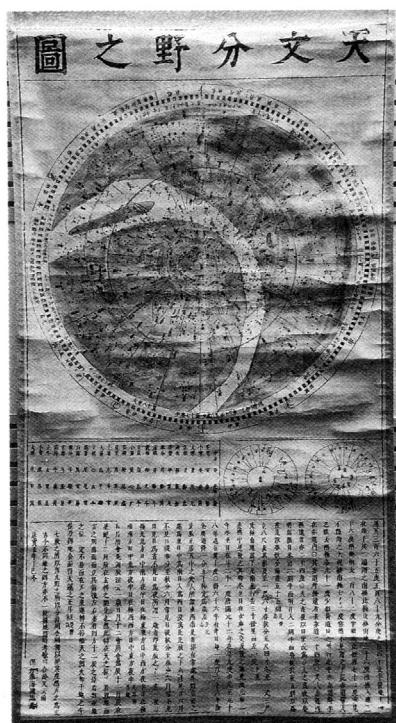
本因坊秀哉の書
本因坊秀哉（1874年－1940年）
本名は田村保寿といい、1908年21世本因坊になりました。秀哉は世襲制では最後の本因坊で、1914年名人位につきましたが、川端康成「名人」（1962年）には秀哉引退碁のときのこと書かれています。



本因坊秀格の書
本因坊秀格（1915年－1986年）
本名は高川秀格といい、1952年第7期本因坊戦で橋本本因坊を破り、以後本因坊戦で九連覇を果たしています。

映画にもなった沖方丁氏の『天地明察』という本の主人公は、3代目安井算哲です。その算哲、どうしても道策に勝てないこともあって、安井家の家督は算知先輩に譲り、自分は天文観測とそれを元にした暦作りに没頭します。その折に作った天文図が残されています。天文図では保井春海と名乗っています。

この安井算哲の文、初代算哲は道頓堀を完成させたうちの1人、安井道卜の甥にあたり、しかも家康の囲碁指南をしていたことが知られています。



以上、雑多になりましたが、興味を覚えた方はいつでも足を運んで下さい。研究所でも時前に連絡すれば、奥にしまっているものも見せてくれるはずですよ。